

1 東近江市の概要

東近江市は、滋賀県の南東部に位置し、京阪神と中京都市圏との中間に位置している。北に彦根市、愛荘町、多賀町、南に竜王町、甲賀市、日野町、西に近江八幡市、安土町と接しており、東は三重県との県境となっている。

地形は東西に長く、鈴鹿山系からふもとに向かい豊かな自然に恵まれたなだらかな丘陵地が広がっており、鈴鹿山系に源を発する愛知川が市内を東西に琵琶湖まで流れ、日野川とともにその流域に肥沃な大地を育み、美しい田園風景を形成している。

気候は表日本型、瀬戸内型気候区に属しているが、内陸型気候の特色をも示し、気温は、年平均15度前後、年間降水量1,700mm前後で、冬季には10～20cmの降雪を見る場合があるものの、全般的には穏やかな気候風土に恵まれている。

市域は、東西約40km、南北約23km、面積は383.33km²、合併時の総人口は117,850人（男性57,969人、女性59,881人）で、世帯総数は38,215世帯である。

鉄道は市域の西部をJR琵琶湖線が、市域の中央を近江鉄道本線が南北に通っており、また近江鉄道八日市駅からJR琵琶湖線近江八幡駅まで近江鉄道八日市線が東西に通っている。JR琵琶湖線は本市と京阪神、中京都市圏を、近江鉄道は市の中心地とJR線とを結んでおり、両鉄道とも本市にとって大変重要なものとなっている。本市の基幹駅となっているJR能登川駅、近江鉄道八日市駅周辺は、土地地区画整理事業を実施し、それぞれの地域の個性を生かした都市機能の集積を図っている。

道路は、名神高速道路、国道8号、国道307号が地域を南北に通っており、交通基幹軸の役割を果たし、国道421号、国道477号は地域を東西に通っており、三重県へとつながっている。現在永源寺地区で実施されている国道421号改良工事完成後は、中京圏との交流軸として重要な役割を担う道路となり、本市は京阪神と中京圏を結ぶ重要な都市となる。





八日市市、永源寺町、五個荘町、愛東町、湖東町、能登川町、蒲生町の沿革

八日市市のあゆみ

八日市市は、滋賀県のほぼ中央部に位置し、琵琶湖の東部に広がる湖東平野の中心にあり、市域の約45%を水田が占めるのどかな田園都市である。

「八日市」の名は、聖徳太子が大阪四天王寺建立のための瓦を箕作山山麓で造らせた時に、各地から集まった人々に交易の道を教え、以来「八」の日に「市」が開かれたことに由来している。古くから経済・商業の要衝として栄え、東近江の中心的な地位を確立。近年は、大手企業の工場立地が進み内陸工業都市としての色彩も強まった。

昭和26年、八日市町と中野村との間で合併協議が始まり、その後八日市町と永源寺村、市原村、武佐村との間で合併についての懇談会がもたれ、また県より八日市町、中野村、市辺村、平田村、玉緒村、建部村、御園村の各村による1町6村合併案が提示されるなど、合併について数々の動きがあった。

昭和29年3月21日、八日市町と中野村が合併し新たな八日市町が発足した後、八日市町のリーダーシップのもと、「商工都市大八日市市」を目指し合併協議がなされ、昭和29年8月15日、当時県内5番目の市として八日市市は誕生した。

江戸時代の中頃より300年以上にわたって受け継がれてきた「八日市大凧」のすぐれた伝統文化と恵まれた自然環境をまちづくりの基本に、「大凧と緑のまち ようかいち」をキャッチフレーズに創造性豊かな個性あるまちづくりを進めてきた。



永源寺町のあゆみ

永源寺町は、湖東平野の東部に位置し、東には鈴鹿山脈がそびえており、町土の約90%を山林が占める中山間地である。

明治22年、町村制により、東小椋村、山上村、市原村の3ヶ村となったが、同25年には東小椋村から高野村が分村し、昭和18年に山上村、高野村、東小椋村が合併し永源寺村となるまで4ヶ村の状態が続き、昭和30年4月1日、町村合併促進法に基づき、永源寺村、市原村が合併し、永源寺町が誕生した。

永源寺町は、愛知川支流域をはじめ、蛇砂川流域の農業と広大な面積の山林を生かした林業を中心に発展してきた。中でも、昭和27年、戦後の食料増産計画の一環として着工された国営愛知川農業水利事業は、その中核となる堰堤が町内に建設され3集落が水没するなど、困難な問題も山積したが、国、県をはじめ、多くの人々の理解と努力により、昭和47年には幹線用水路も完成し、永源寺町ばかりでなく1市8町にまたがる約8,000haの農地を潤すに至った。

また、県境の鈴鹿山脈を中心に、昭和43年7月、本町の8,461haが国定公園に指定され、本山永源寺とともに毎年多くの観光客で賑わっている。



五個荘町のあゆみ

五個荘町は、湖東平野の中西部に位置し、のびやかな田園に開けた中仙道の要所として古くから栄え、町内各地に往時をしのばせる古墳や、神社仏閣の宝物、仏像、伝承文化などが数多く残り、また古代地籍を示す条里制の跡も保存され、先人の築いた豊かな歴史の流れが文化遺産の中に息づいている。

昭和30年1月、町村合併促進法により、旭村、南五個荘村、北五個荘村と安土町の一部清水鼻が合併し、五個荘町が誕生した。

昔、観音寺山の東に展開された神崎郡の中央部一帯を山前庄、または山前五個荘と呼んでいた荘園時代からの流れで、明治時代に入り山前が五個荘と呼ばれるようになったと言われている。

中世、武士が台頭しこの地一帯は近江源氏佐々木氏が守護職となったが、その前後から中郡商人として特に小幡商人は中仙道を中心として市場、商座を設けて活躍し、江戸中期から明治、大正、昭和にかけて全国各地に雄飛し、多くの商人魂の源を築いた近江商人の名を全国津々浦々にとどろかせた。



愛東町のあゆみ

愛東町は、湖東平野の中東部に位置し、東には鈴鹿山脈がそびえ、南東から北西に流入する愛知川が町域の南端を流れ、南北に国道307号、名神高速道路が縦断している。また、町土の約60%が山林で占められており、残る土地は田畑が広がっている。

昭和の合併で、西小椋村では隣接している八日市市への合併を望む声があったものの、町村合併促進法により昭和30年2月、西小椋村、角井村が合併し愛東村となり、昭和46年2月、町制を施行した。

愛東町のまちづくりの永遠の理念は「愛の田園」(『人を愛し、ふるさとを愛する人がひとりでも多くいることが、町にとって一番幸せなことではないでしょうか…(愛の田園づくり計画より抜粋)』)であり、人と人との共生や自然との共生を軸に地域特有の理想郷をみんなで創り出していくことを目標にまちづくりを実践してきた。

また、農業を大切にした「まちづくり」も推進し、今では、米をはじめ、ぶどう、梨、メロン、イチゴ、トマト、スイカなど多くの農産物が盛んに生産され、それら農産物は、道の駅あいとうマーガレットステーションで販売をされている。

最近では環境をテーマにした取り組みも積極的に行っており、全国へと広がりつつある資源循環型社会をめざす「菜の花エコプロジェクト」は、このまちが発祥である。



湖東町のあゆみ

湖東町は、湖東平野の中央部に位置し、昭和29年11月、東押立村、西押立村、豊椋村の三ヶ村が合併し誕生した。

鈴鹿の峰々を源流とする愛知川と宇曾川に囲まれ、湖東平野に広がる豊かな田園と春日神社や押立神社、豊国神社、善明寺といった古社寺が田園の中に鎮守の杜として点在するとともに、ため池、そして31のまとまりのある集落環境の中で、のどかな



農村空間を築いてきた。

近年、下水道など生活環境を中心に社会基盤の整備を進め、図書館、町民プール、CATVなど住民が共に学び参加できる施設や、ひばり公園や探検の殿堂、ヘムスロイド村など多くの人々が集い交流できる環境が整備される中、「明日に翔く希望のまち」をキャッチフレーズに、豊かな自然を守り育てながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりや、地域の資源を十分に活かしながら、すべての人が生き活きと輝き活躍できる地域づくりを目指してきた。

能登川町のあゆみ

能登川町は、琵琶湖の東岸、湖東平野の西部に位置し、町の中央部をJR琵琶湖線が走り、東へ続く中京都市圏と、西に続く京阪神を結ぶ沿線を軸に発展を続けている。また、北部から東部にかけては愛知川緑地と、南部は安土山と織山系によって囲まれた水と緑あふれる自然美豊かな田園都市である。

明治初期、いくつもの小村の集合体だった本町は分合が激しく、明治18年に連合戸長役場制が実施されると、この地区は能登川村ほか8ヶ村、小川村ほか8ヶ村、福堂村ほか5ヶ村の三連合戸長役場に編成され、その後幾度となく分離、統合が繰り返し、昭和17年に八幡村、五峰村、能登川村、伊庭村、栗見村の5ヶ村が合併し、能登川町が誕生した。

近年、「魅力と活力ある郷土づくり」を旗印に、JR能登川駅周辺は土地区画整理事業により快適な環境づくりのための整備が着々と進められ、京阪神のベットタウンとして人がにぎわう一方、古来より絶えることのない水の恵みにより育まれた田園が琵琶湖にかけて広がりを見せ、自然と人が調和した活力あるまちとして発展を遂げている。また、関西一の大水車がある「能登川水車とカヌーランド」を会場に熱戦が繰り上げられるドラゴンカヌー大会は、夏の風物詩となっている。



蒲生町のあゆみ

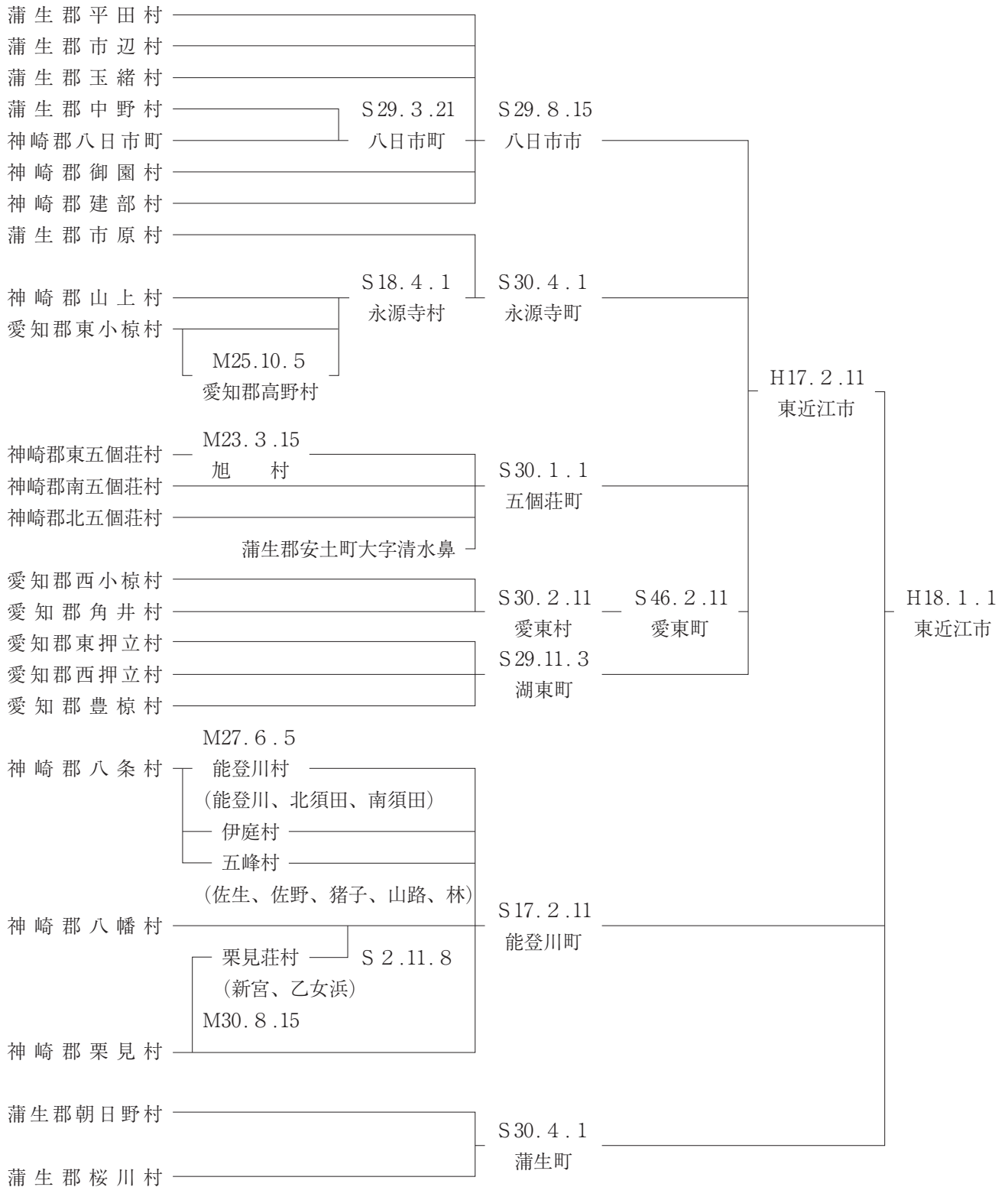
蒲生町は、湖東平野の南部に位置し、北には布引丘陵、南には鏡山丘陵と呼ばれる古琵琶湖層の緩やかな丘が町域を区切り、中央部には、佐久良川と日野川によって沖積された低地が広がっている。開発の歴史は古く、古事記にもみられるように蒲生稲寸の居住の地として開拓され、その祖神を祭る古社が現存している。また、綺田は錦陵製織の古地、鋳物師及び鈴は鋳鉄鍛冶といった工人ゆかりの地名も遺存し、この地の山野に古くから工業家の分布があったことを物語るもので、工芸と文化の香りが豊かである。中世には、桧物荘、市子荘、麻生荘、綺田荘などとして社寺、公家の領地に属し、蒲生氏、佐々木氏の所領として時代の推移とともに発展し、徳川時代には、伊勢参宮の御代参街道の宿駅として栄え、江戸時代には多くの近江商人が輩出している。

昭和30年4月1日に、朝日野村と桜川村が合併し、蒲生町が誕生した。昭和30年代は近江穀物地帯の一翼を担った純農村であったが、昭和30年代後半から昭和40年代後半にかけての日本経済の高度経済成長や名神高速道路の開通などに伴い、企業誘致や宅地開発が進み、人口の増加など都市傾向化し、一大改革期を経てきた。

こうした発展に呼応して、産業の振興・福祉・教育・文化の向上と生活環境整備が着々と進み、恵まれた自然環境を生かしながら発展をとげてきた。



《町村合併の経緯》



3 合併の背景

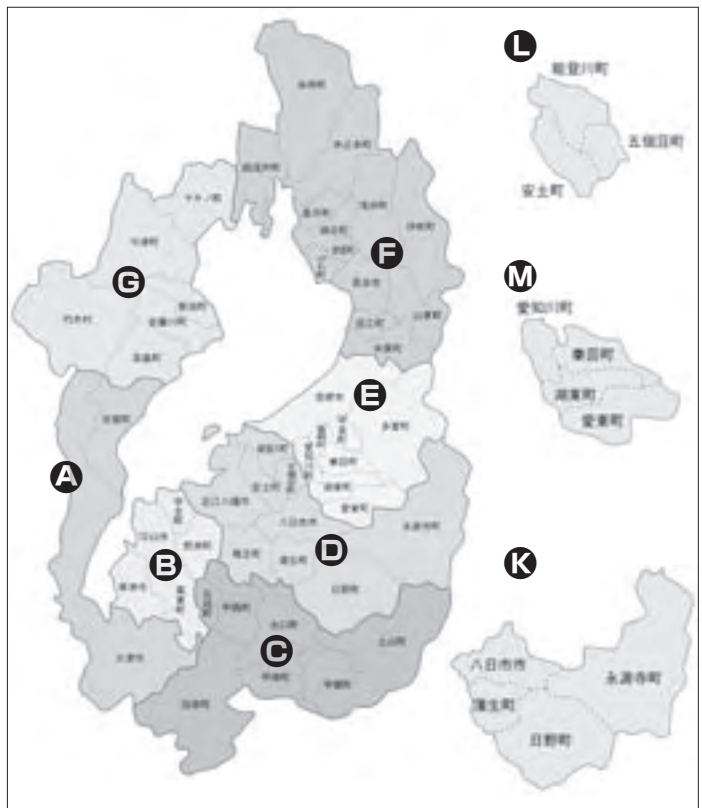
合併構想

当地域は、滋賀県の南東部に位置し、現在の合併に至るまでは八日市市、神崎郡、蒲生郡、愛知郡の1市3郡にまたがっており、八日市市、蒲生町、永源寺町、五個荘町、能登川町は近江八幡市、安土町、日野町、竜王町と東近江行政組合を、また愛東町、湖東町は愛知川町、秦荘町と愛知郡行政組合を組織し、広域行政として一部事務の共同処理に取り組んでいた。

このような中、これまでの中央集権型行政システムからの転換を図り、地域のことは地域が責任を持っていく地方分権の推進が大きな課題となり、分権型社会を構築していく上で住民にとって基礎的自治体である市町村は、厳しい財政事情下で多様化・高度化する住民ニーズに対応する専門的で質の高いサービスの提供を求められるようになった。

これらの要望に対応するひとつの手段として市町村合併が考えられ、平成10年から八日市県事務所において東近江地域での市町村合併を考える「将来のまちを考える東近江地域懇話会」が設置され、色々な具体的パターンで問題点など事前検討が行われた。

その中での案として、近江八幡市、八日市市、安土町、蒲生町、日野町、竜王町、永源寺町、五個荘町、能登川町の2市7町による合併。近江八幡市、安土町、蒲生町、日野町、竜王町の1市4町の合併、八日市市、永源寺町、五個荘町、能登川町の1市3町合併。近江八幡市、安土町、五個荘町、能登川町の1市3町合併。八日市市、永源寺町の1市1町合併。安土町、五個荘町、能登川町の3町合併。蒲生町、日野町、竜王町の3町合併。そして近江八幡市、八日市市、安土町、蒲生町、日野町、竜王町、永源寺町、五個荘町、能登川町の2市7町に愛東町、湖東町を含む2市9町の合併パターンが示された。



合併パターン（滋賀縣市町村合併推進要綱から抜粋）

合併の動き

このような懇話会の報告を受け、どのような合併が住民の福祉向上に一番つながるか検討を始めたところ、安土町、五個荘町、能登川町の3町が生活圏域、地域のつながりなどから、平成12年11月東近江地域3町合併等研究会を設置し、3町での合併についての検討を始めた。

東近江は1つと広域行政等進めてきていた中、3町が合併について先行したため、竜王町が「2市7町全体の合併を目指したい」と表明されるなど、合併の枠組みについて各市町の考え方の違いが現れる

● 東近江市誕生までのあゆみ ●

ようになった。

このような中、これからの地方分権時代に対応するためには、市町村合併は避けて通ることが出来ない問題と共通認識をもった八日市市、蒲生町、日野町、永源寺町の1市3町は、生活圏域等とともにすることなどから、平成13年1月、職員による東近江東部地域行政研究会を設置し、合併に関する各種調査研究を始めた。

先行した安土町、五個荘町、能登川町による東近江地域3町合併等研究会は、事務事業の洗い出しやパネルディスカッション等を実施しながら、協議会設置に向けた検討を進め、平成13年4月、任意の協議会である東近江地域3町合併検討協議会を発足させ、住民代表を交えながらの本格的な検討を始めた。

その後、平成14年1月には法定による協議会に切り替えられ、調整項目、新市建設計画等協議決定され、また3町合同でISO14001の取得、図書館の共同利用、観光キャンペーンなど、新市への移行に向けた取り組みを進めるなど順調に合併への歩みを進めた。しかし市の名称を決定する頃から、五個荘町において近隣での合併協議の状況、決定された新市の名称などから徐々に3町合併についての疑問の声が住民などから上がりだし、五個荘町区長会が独自にアンケート調査を実施され、その集計の結果、3町での合併推進の回答が29%にとどまり、五個荘町議会で「3町合併を見直し、東近江地域を中心とした2市5町（近江八幡市、八日市市、蒲生町、日野町、永源寺町、愛東町、湖東町）合併への参画を求める決議」がなされ、一気に情勢が変化し、五個荘町が3町合併から離脱、この結果を受け、平成14年12月末をもって東近江地域3町合併協議会は解散された。

一方、八日市市を中心に検討を始めた東近江東部地域行政研究会は、1年にわたり合併の研究を行うとともに、住民への情報提供として住民フォーラムや住民説明会の開催、情報紙の発行、ホームページの開設など積極的に合併推進に向けた取り組みを行ってきた。また首長、議会はそれぞれで会議を持ち、その中で地域のおかれている現状を認識しつつ、今後のまちづくりの進め方について一定の方向性を考察し、1市3町による合併の実現に向けた取り組みをさらに進めていくことに至り、平成13年12月東近江東部地域議会代表合同懇談会を、平成14年4月1日には法定の東近江東部地域合併協議会を設置し、事務事業調整、新市建設計画など合併に向けた協議を進めていった。

こうした合併協議を進めている中、近江八幡市（平成13年12月）、愛知郡愛東町（平成14年2月）、同湖東町（平成14年2月）から合併協議参画の申し出があり、2市5町合併研究会で新たな枠組みへの移行についても並行して協議が進められた。

平成14年9月には1市3町に参画申し出のあった1市2町を加え、2市5町による合併協議を進めていくことが確認され、1市3町による協議会を休止し、2市5町による協議会設置への移行準備に入り、平成15年1月から新たな枠組みで協議会の再出発を図る検討がされた。

しかしながら、近江八幡市、蒲生町、日野町、永源寺町、愛東町、湖東町では法定協議会設置議案が12月議会で議決されたものの、八日市市議会で「住民から枠組みの見直しや2市5町の枠組みへの疑問、また、12月に参画の意向を示された五個荘町を含めた合併協議などの声が高まっており、民意が充分反映されていない」ことを理由に継続審議とされ、2市5町の足並みがそろわない状況となった。

その後八日市市では行政、議会が度重なる協議を行い、議決に向けて努力されたが、自治会8地区中7地区から反対の要望書が出されるなど、最終的に議会が「民意を尊重し、新たな枠組みを検討することを強く求める」との結論を出されたことにより、2市5町での合併協議への参加を断念し、2市5町の合併は白紙に戻された。これに伴い、1市3町の信頼関係も揺るぎ、このような中で1市3町の協議を続けていくことは出来ないと判断され、平成15年3月議会において東近江東部地域合併協議会解散議案が可決され3月31日で解散された。

このように、県内でも積極的に取り組んできた当地域の市町村合併議論はすべて白紙に戻された。